

「ぼくもそうです」とレオンが答えた。「たしかに、風が窓ガラスを打ちつけ、ランプが燃えている夜などに、炬ばたで本に読みふけるほど快適なことがあるでしょうか？……」

「ですよね」と彼女は言いながら、大きな黒い目をみはって青年を見つめた。

「考える間もなく」と青年はつぶけた。「時は過ぎてゆきます。その場にじつとしているのに、さまざまな国を^へ経めぐり、この目で見ている気がして、思いは想像と^{から}絡み合い、細部に遊び、あるいは出来事の輪郭を追い、こちらの思いまでが作中人物と混じりあつて、その人物の衣装を着て自分がどきどきしているように思われてきます」

「そうね！ その通りね！」と彼女は言った。

「ときにこんなことはありませんか」とレオンはつぶけた。「本のなかで、かつて漠然と自分が抱いた考えに出会ったり、はるかによみがえりつつある曖昧なイメージあいまいかなにかに遭遇したり、この上なく繊細な自分の感情なのに、それがそっくり提示されているようなことが？」

「そういうこと、ありますわ」と彼女は答えた。

「ですから」と青年は言った。「ぼくはとりわけ詩人が好きです。散文より詩のほうが琴線きんせんにふれてくるように思いますし、気持ちよく泣かせてくれますからね」

「でも、詩ですとそのうち飽きてしまいます」とエンマはつぶけた。「そして、いまではわたし、

反対に、はらはらしながら一気に筋が追える物語に目がありませんの。どこかそのへんにあるような、平凡な主人公やぬるい感情なんて、大嫌いなんですわ」